論文

物語絵本を用いた「命の教育」

―保育者を対象としたアンケート調査を通して―

Education of life using picture books: Through a questionnaire survey for nursery teachers

川上　綾音（元高知大学教育学部生）[1]
玉瀬　友美（高知大学教育学部）[2]

KAWAKAMI Ayane[1] and TAMASE Yumi[2]

1 *Former Undergraduate Student, Faculty of Education, Kochi University*
2 *Faculty of Education, Kochi University*

ABSTRACT

The purpose of this study was to examine what kind of picture books nursery teachers use to teach infants the importance of life. We analyzed the questionnaire for 403 persons. As a result, the following results were obtained. Most of the nursery teachers thought that the education of life was necessary in early childhood education, and they conducted the education of life. Many nursery teachers had experienced reading a picture book about life for preschool children. It was not a picture book of the death but a picture book in which the wonderfulness of living was drawn to read to the preschoolers when nursery teachers educated the life.

Ⅰ．問題と目的

「命は大切である」ことを改めて認識するような痛ましい事件や災害が発生している現状がある。命あるものをいたわり、大切にする気持ちを共有することは、時代を問わず、人が生きていく上で必要とされることである。自分の命も他者の命も大切であることに気づくことは、幼児期の教育においても重要なねらいの一つとされている。

平成29年3月告示の幼稚園教育要領第1章総則における「第2 幼稚園教育において育みたい資質・能力及び『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』」には、「知識及び技能の基礎」「思考力、判断力、表現力等の基礎」「学びに向かう力、人間性等」から成る資質・能力が幼児の生活全体を通して育まれた時、幼稚園修了時にみられるであろう具体的な姿があげられている。すなわち、「健康な心と体」「自立心」「協同性」「道徳性・規範意識の芽生え」「社会生活との関わり」「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」の10の姿である。このうち、「自然との関わり・生命尊重」については、「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探求心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にする気持ちをもって関わるようになる。」と示されている。また、「第2章 ねらい及び内容」の領域「環境」の「2内容」（5）には、「身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。」と示されている。このように、幼児教育において「命の教育」は重要なものとして位置づけられているのである。

デーケン(2001)は、「死を身近な問題として考え、生と死の意義を探求し、自覚をもって自己と他者の死に備える心構えを習得することは、いま、あらゆる面でもっとも必要とされる教育といえよう」と述べ、よりよく生きるための「生への準備教育」としての「死への準備教育」の重要性を指摘し、「生」の教育と「死」の教育は、併せて行うべきであることを提言している。そして、幼児においても死の教育は重要であり、子どもの理解度に合わせて、子どもの悲嘆に対応することが必要とされることを、事例をあげながら考察している。

それでは、「死」について、子どもたちはどのように理解しているのであろうか。

竹中・藤田・尾前(2004)は、3歳から6歳児を対象として「死」の内容を含む紙芝居を読み、その後に質問した。質問項目は、体の機能の停止である「死の不動性」、一度死ぬと生き返れないという「死の不可逆性」、命あるものは必ず死ぬという「死の普遍性」に関するものと「死」のイメージを問うものであった。その結果、不動性は、4歳7ヶ月から理解し始め、不可逆性は、3歳9ヶ月から理解し始め、いずれの概念においても6歳前後でほとんどの幼児が理解していた。また、普遍性は、4歳3ヶ月から理解し始め、6歳2ヶ月以上でほとんどの幼児が理解していた。

同様に、辻本(2010)は、幼稚園年少児から年長児を対象として、「死」の内容を含む紙芝居を読み、その後に質問した。質問項目は、死の不動性、不可逆性、普遍性に関するものと、死後観および死に対するイメージに関するものであった。その結果、それぞれの質問に対して十分に適切な回答ができていた者が 50%を超えていたのは、不動性に関しては年中児以上、不可逆性に関しては年少児以上であり、普遍性に関しては、年長児以上であった。

このように、幼児は「死」について理解しはじめているといえよう。特に、「死の不可逆性」に関しては、3～4歳から理解できていることが示されている。そして、死の不動性、不可逆性、普遍性の3つの概念が理解できるのは、5歳から7歳頃であるといわれている (Speece, M. W&Brent, S. B, 1984)。保育者においては、子どもたちの発達段階に合わせて、「生」と「死」を含む、「命の教育」を行うことが必要であろう。

幼児を対象とした「死」の教育について、井柳(1989)は、保育者を対象にして、幼児の「死の教育」に関するアンケート調査を実施している。その結果、回答者の9割以上が「死の教育」は必要であると答えていた。この調査を通して、井柳(1989)は、幼児に対する「死の教育」の必要性を感じている保育者は多く、具体的な方法を探している状態であると述べている。このことから、保育者が「死の教育」の必要性を感じながらも、どのような教材を通して教育を進めればよいのか苦慮していることが伺える。

「生」と「死」を含めて命の大切さについて幼児に伝えるための教材として絵本がある。工藤(2006)は、絵本を用いて命の問題について子どもに教える際に保育者に求められることとして、①対象となる子どもが死の問題をどのようにどれほど理解しているか(発達段階)、②子どもが死の問題に直面した場合どのような反応を示すか、③絵本の中に描かれた世界がどのように子どもたちに影響を与え理解されるかについて総合的に理解する能力をあげている。このように、工藤(2006)では、保育者が「生」と「死」について子どもたちに教える際に絵本がすぐれた教材となることが示唆されているが、実際に保育者は「命の教育」をする際に絵本を読んでいるのか、また具体的にどのような絵本を読んでいるのかについては検討されていない。

本研究では、保育者が子どもたちに「命の教育」をする際にどのような意識をもち、どのような絵本を用いているのかについて明らかにすることを目的としている。

Ⅱ．方法

調査対象　K県内の公立保育園・幼稚園・認定こども園140園に対してアンケートを送付し、104園から回答があり、454名のアンケートが得られた。回答が必須の設問に対し無回答であったり、複数回答されていたり、など不備があるものを除き、403名のアンケートについて分析を行った。アンケートの回収率は 64.9%、有効回答を得たアンケートは57.8%であった。

調査期間　2018年8月13日から9月30日まで

アンケート内容

1. 回答者の属性
   ⑴年齢　⑵性別　⑶保育経験年数
2. 「命の教育」について
   ⑴幼児教育において「命の教育」は必要か否か
   ⑵命の教育を行った経験があるか
   ⑶行っていた場合どのような教育をおこなったか
3. 絵本を使った「命の教育」について
   ⑴「命」に関する絵本や紙芝居を読むことは重要だと思うか否か
   ⑵そのような絵本や紙芝居を読んだことがあるか
   ⑶「命」に関する35冊の絵本リストのうち、読んだことのある絵本及び読みたいと思う絵本はどれか
   「命」に関する絵本35冊から成るリストは、尾上明子・中根淳子(2009)、福山幸恵(2003)、鳴門教育大学の絵本データベースで「死」をキーワードに検索してヒットした絵本等から作成され、「タイトル」「作者」「出版社」「内容」が記載されていた。35冊の絵本については資料1に示す。
4. 回答者が読んだことのある「命」に関する絵本（自由記述）
5. 「命」に関する教育についてどう思うか(自由記述)

倫理的配慮

調査協力者に対して、データは研究目的のみに使用し、それ以外の目的で使用することは決してないこと、分析結果の公表時においてプライバシーは保護されること、また、研究協力に関して承諾しない場合であっても、それによって何ら不利益を被ることはないことを説明し、協力の承諾を得た。

Ⅲ．結果

1．対象者の属性

（1）年齢

20代が91名(22.6%)、30代が94名(23.3%)、40代が102名(25.3%)、50代が106名(26.3%)、60代が10名(2.9%)であった。

（2）性別

男性が25名(6.2%)、女性が378名(93.8%)であった。

（3）保育経験年数

保育経験年数は平均して16年であった。

2．「命」の教育について

（1）幼児教育「命の教育」は必要か

「はい」と回答した者が401名、「いいえ」と回答した者は2名であり、ほとんどの保育者が幼児教育において「命の教育」は必要であるという認識を示していた。

（2）「命」の教育を行ったことがあるか

「はい」と回答した者が345名(86.0%)、「いいえ」と回答した者が56名(14.0%)であり、8割以上の保育者がなんらかの「命」の教育を行ったことがあった。

「命の教育を行った」と答えていた保育者の割合を保育経験年数ごとにみると、1～5年では、63.0%、6～10年では80.6%、11～20年では91.2%、21～30年では91.3%、31年以上では98.6%であった。保育経験年数が31年以上の保育者はほぼ全員が命の教育を行っていた。

（3）どのような「命の教育」を行ったか。

表1は項目ごとにそれぞれの「命の教育」を行ったと回答した人数を示したものである（複数回答可)。「その他」の内容としては、「家族の協力をもらい、生まれた時の話やへその緒について話す」、「戦争、平和のはなしをする」などの回答があった。

表1　それぞれの「命の教育」を行った人数

命の教育	人数
①生き物や植物を育てる	331
②食育	277
③生や死に関する話をする	266
④生や死に関する絵本や紙芝居を読む	262
⑤その他	36

表2は、保育者が行った「命の教育」を保育経験年数別にまとめたものである。「生き物や植物を育てる」「食育」「生や死に関する話をする」「生や死に関する絵本や紙芝居を読む」に関して、それらを命の教育として行っていた保育者の割合は保育経験年数が上がるにつれて高いことがわかった

3．絵本を使った「命の教育」について

（1）幼児教育において「命」に関する絵本や紙芝居を読むことは重要だと思うか

「はい」と回答した者が396名(98.3%)、「いいえ」と回答した者が7名(1.7%)であった。幼児教育において「命」に関する絵本や紙芝居を読むことが重要だという意識が保育者の中では高いということがわかった。

（2）「命」に関する絵本や紙芝居を読んだことがあるか

「はい」と回答した者が370名(91.8%)、「いいえ」と回答した者が33名(8.2%)であり、ほとんどの保育者が「命」に関する絵本や紙芝居を読んだことがあることがわかった。

（3）「命」に関する絵本

35冊の絵本リストの中で、「読んだことのある絵本」として選択

表２　保育経験年数別にみた「命の教育」を行っている割合（%）

「命の教育」	保育経験年数				
	1－5年	6－10年	11－20年	21－30年	31年以上
①生き物や植物を育てる	54.1	77.4	86.8	89.4	94.4
②食育	37.8	56.5	71.4	77.9	86.1
③生や死に関する話をする	27.0	66.1	70.3	74.0	81.9
④生や死に関する絵本や紙芝居を読む	33.8	54.8	65.9	78.8	86.1
⑤その他	0	4.8	7.7	12.5	22.2

した人数が 300 名以上であったのは、『３匹のこぶた』(381 名)、『じごくのそうべえ』(373 名)、『マッチ売りの少女』(342 名)、『ごんぎつね』(335 名)、『100 万回生きたねこ』(318 名) であった。「読んでみたい絵本」として選択した人数が 100 名以上であったのは、『いのちのたべもの』(110 名)、『おじいちゃんがおばけになったわけ』(105 名)、『だいじょうぶ だいじょうぶ』(100 名) であった。

4.「命」に関する絵本について

絵本リスト以外で、読んだことのある「命」に関する絵本を自由記述してもらったところ、483 冊があげられた。そのうち、15 名以上があげていた絵本は、『かわいそうなぞう』(51 名)、『あやちゃんのうまれたひ』(17 名)、『まちんと』(17 名)、『おかあさんがおかあさんになった日』(16 名)、『おへそのあな』(16 名)、『ママがおばけになっちゃった！』(16 名) であった。『かわいそうなぞう』は戦争中に殺された、上野動物園の三頭の象の実話を絵本にしたものである。『あやちゃんのうまれたひ』は、あやちゃんの誕生日が近いある日、おかあさんがあやちゃんが生まれた日のことを話すというストーリ―である。『まちんと』は昭和 20 年 8 月 6 日の原爆に傷ついた少女の話である。『おへそのあな』は赤ちゃんの誕生、『ママがおばけになっちゃった』は母親という親しい人物との死別を描いたものである。そのほかに、グリム童話やアンデルセンの童話全般、防災関係の絵本、戦争や原爆に関する絵本を読んだという回答が得られた。

5.「命」に関する教育について

「命」に関する教育についてどう思うのかを自由に書いてもらったところ、267 名の記述が得られた。その内容にどのような傾向があるのかを把握するために、KH Coder(Ver. 3Alpha. 8)を用いて計量テキスト分析を行った。計量テキスト分析とは、「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析(content analysis)を行う手法である」(樋口,2014)とされている。

図１から図５は、「命」に関する教育についてどう思うのかについての自由記述データに基づく語の共起ネットワークを、保育経験年数ごとに示したものである。図１から図５では、出現数が多いほど円が大きく、強い共起関係ほど円をつなぐ線が太い。

【保育経験年数 1～5 年の保育者】

図１において、「絵本―読む―幼児」が比較的大きめの円で描かれ、繋がっているのは、「絵本を使った読み聞かせによって『命』について学んでもらいたい」、「わからなくても絵本を読むこと自体が大切だと思う」などの記述が多く見られたためである。また、「生き物―植物」が「育てる」とそれぞれ繋がっているのは、保育経験年数が 1～5 年の保育者は絵本を読むことと同様に生き物や植物を育てることも「命」の教育として重視しているためであると思われる。

【保育経験年数 6～10 年の保育者】

図 2 においても絵本という語が頻出しているが、図１とは異なり、「絵本―伝える」「絵本―大事」「絵本―感じる」と繋がっている。保育経験年数が 1～5 年の保育者は「絵本を読むこと」自体を重視することが多かったが、保育経験年数が 6～10 年の保育者は、「生や死を身近に感じる中で、命の大切さに気付いてもらえるように、絵本等を通して伝えていきたいと思う」「命は一つしかないからこそ大事にする心をもってほしいと思っている。自分の命はもちろん、友達、家族、生き物全てに命があり、大切にしていってもらいたいので、子ども達にもわかりやすいよう絵本なども取り入れながら伝えていきたいと思う」という回答があったことからもわかるように、絵本を通して「命」や「生や死」について子どもたちに伝えることを重視している。また図１にはなかった「経験」という語が出現している。「経験 - 一つ」という繋がりは、「幼児期に実際の生き物に触れ、命を実感したり、命は一つしかないということを幼いながらに感じたりする経験はとても大切だと思う」という記述があったことによる。保育経験年数が 6～10 年の保育者は、生きものなどの命に触れる経験を通して、命が一つしかないということを感じることを重視することがわかった。

【保育経験年数 11～20 年の保育者】

図３は、保育経験年数 11～20 年の保育者の「命」の教育に関する記述に基づく共起ネットワークである。図２と同様に「絵本―伝える」という繋がりが見られた。「『命の教育』について、絵本や紙芝居を読むことは重要だ。子どもの身近な物で伝えることで、子どももお話の中に入り込みやすく、良いと思う」という記述のように、

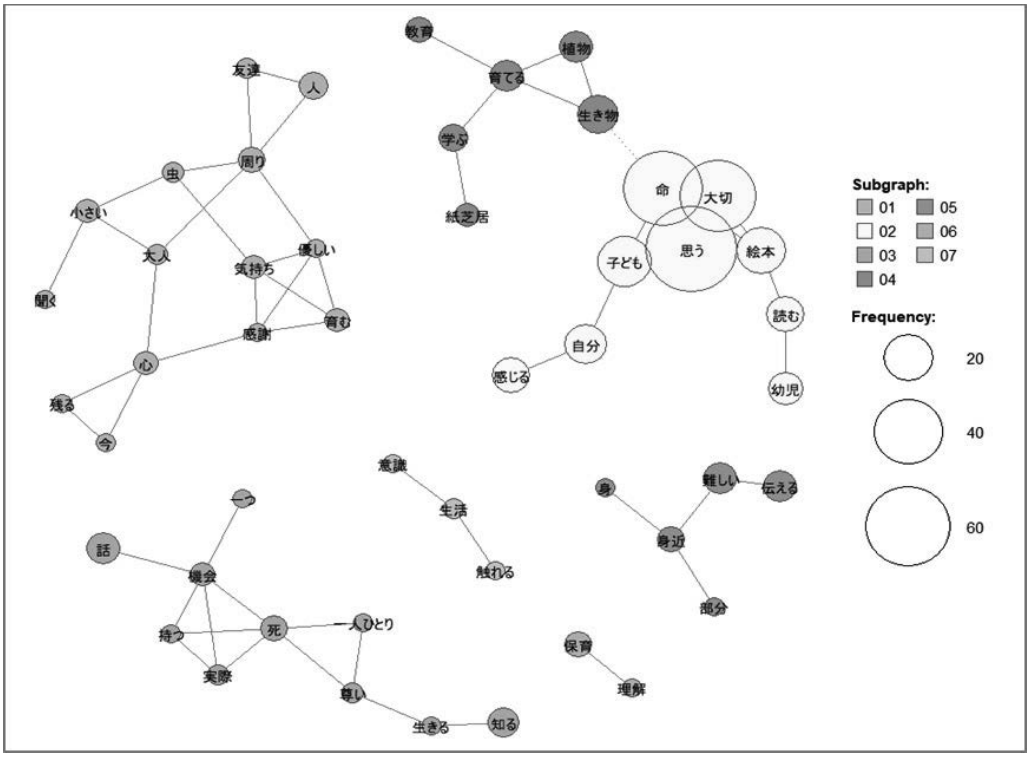

図１　共起ネットワーク（保育経験年数 1～5 年の保育者）

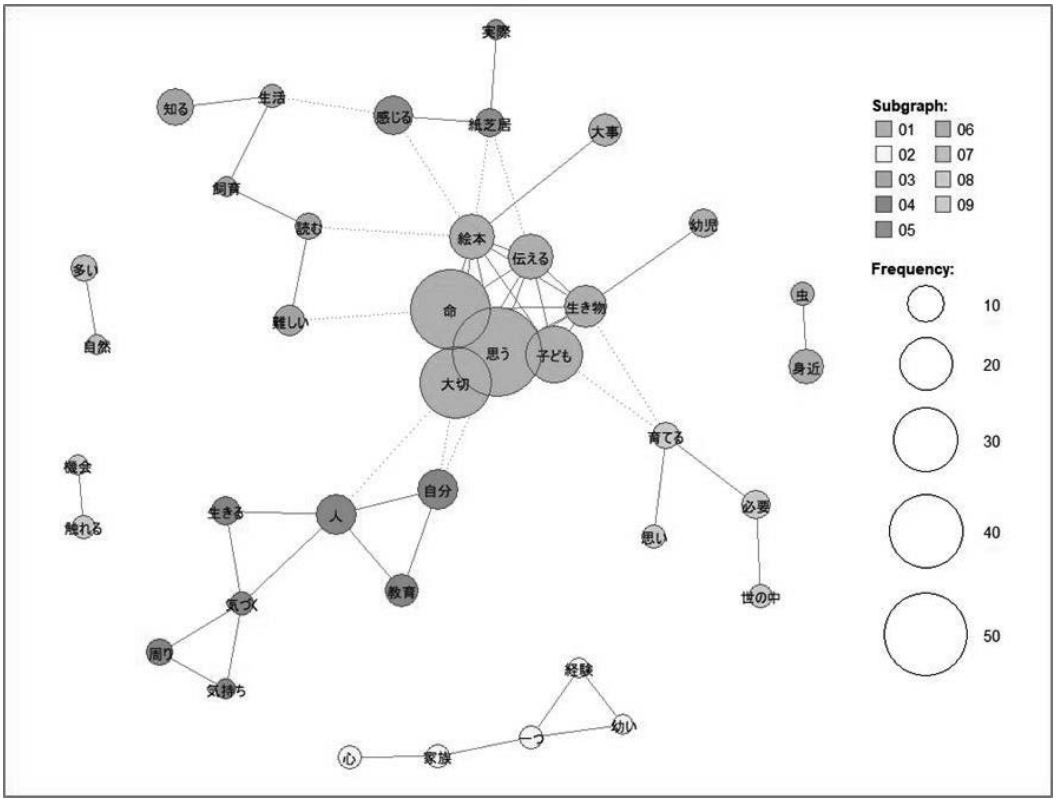

図２　共起ネットワーク（保育経験年数 6～10 年の保育者）

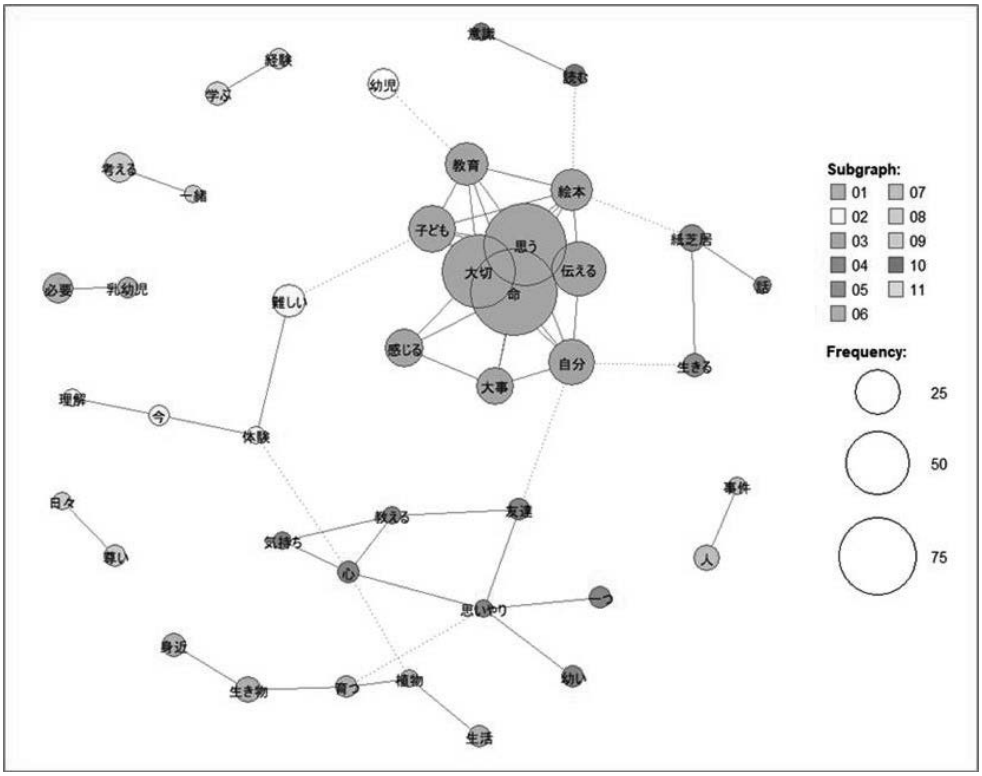

図３　共起ネットワーク（保育経験年数 11～20 年の保育者）

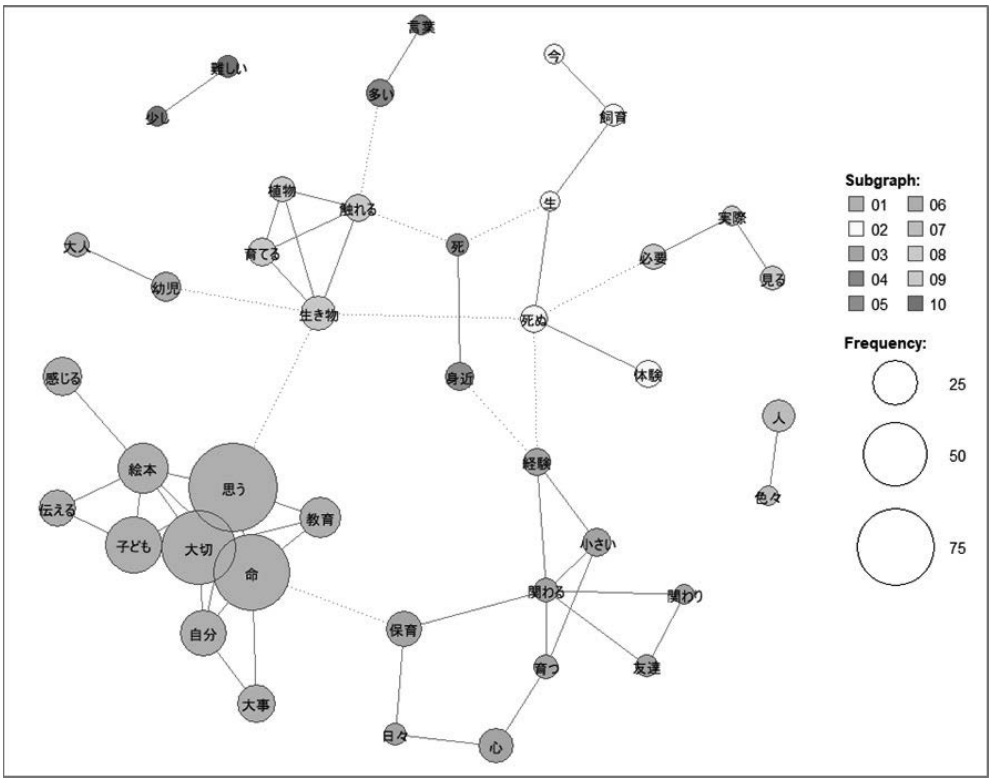

図４　共起ネットワーク（保育経験年数 21～30 年の保育者）

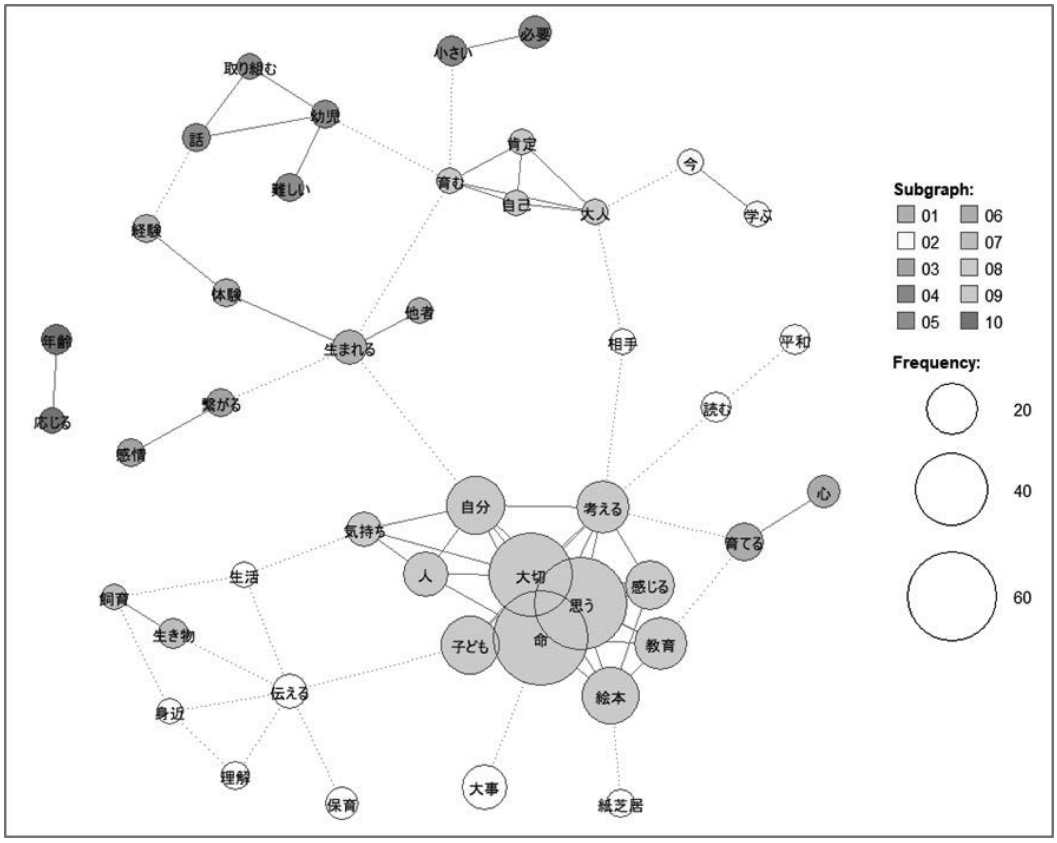

図５　共起ネットワーク（保育経験年数 31 年以上の保育者）

「命」に関する絵本や紙芝居を読むことを重要としたうえで、それらを用いて命について子どもたちに伝えることを重視している保育者が多数いることがわかった。また「絵本―読む―意識」という繋がりについては、「小動物への関わり方など、命に関する教育は大切だなと思うことはよくあるが、伝えていき方には悩むこともあった。リストにある絵本も幼児に対して読んだものも、個人的に読んだことのあるものもあったが、命の教育という意識をそこまでもっていなかった。そのことを意識しながら絵本を取り入れて保育していくことで子供たちに命の大切さが自然に伝わっていくのではないかと思った。」という記述があった。ただ絵本を読むのではなく、意識して絵本を読むことを心がけようという保育者の姿勢がみられる。また、ここで初めて「経験」のほかに「体験」という語が頻出した。「体験を通して学ぶことが多い幼少期に、命について絵本や物語を通して感じ得ることは大切な教育だと思う。命の尊さを伝えることや、生と死とどう向き合うかは、幼児の心にどう響くかという視点でも難しさがあると思うが、自分が今生きていることを実感できるような教育も大切である」という記述があったように、「経験」だけでなく「体験」も重視している保育者が増えていることがわかった。

【保育経験年数 21～30 年の保育者】

図４における「絵本―感じる」「絵本―伝える」という繋がりは、「理解が深まる４歳児、５歳児の時期に特に大切にしていきたいと思う。絵本や日々の出来事ともからめて伝えていきたい。子どもたちの深い理解に繋がるためには、保育士が意識をもって『命』について知らせることが一番のカギかなと思う」という記述などによるものであり、絵本を用いて伝えることを重視する保育者が多くいることがわかった。また、「友達―関わり」「友達―関わる」という繋がりは、「集団生活の中でたとえ０歳児でも友達と関わることで成長していく感情、思いやりなど、先を見据えて人との関わり、コミュニケージョン能力をつけていくため、あなたたちは愛されていることを実感できるように、一人ひとりの違いを認める事、ほめられる経験を豊かにして命を大切にできる人に育つよう願って保育にあたっている」「友達と関わる中で、様々な感情を経験し、その中で自分を大好き、友達を大好きなどという気持ちを育むことも『命』を大切に思う為の土台として大切だと思う。そのような土台を作っていける関わりを子どもたちとしていきたいと思う」という記述によるものであり、友達との関わりの中で友達を大切にすること、ひいては自分を大切にすることもまた「命」の教育であると認識している保育者がいることが分かった。

【保育経験年数 31 年以上の保育者】

図５では、「絵本―教育」という繋がりが見られた。「(命の教育は)とても大事な教育だと思う。このアンケートを書くことで、命に関する絵本を購入したいと思った」、「保育園児でも命の教育「死」については絵本や行事をとおして教えるべきだと思う」というよう

に、「絵本」を「命の教育」として用いることに肯定的な意見が多くみられた。また図５における「自己―肯定」という繋がりは、図１から図４にはみられなかったものである。これは、「(命の教育として)まずは自己肯定感を育むことが重要だと思う。小さい頃からいっぱい成功体験をして、達成感や満足感を十分感じ、自分を好きになることで、他者への気付きも生まれて、他者の気持ちがわかるようになると思う。命を大切にするためには、まず自分の命を守り、生き抜く力、そしていろんな人と知り合い、共感したりしていくことが大切だと思う。」という記述があったように、「命の教育」として、自己肯定感を育むことが大切だと考える保育者が、保育経験年数が 31 年以上の保育者の中には多かったことを示している。

図 1～5 から、保育経験年数があがると、「命の教育」としてとらえる内容が広くなっていることがわかる。保育経験年数が 1～5 年の保育者ではネットワークが小さいが、保育経験年数が 21～30 年、31 年以上の保育者になるとネットワークが大きくなっており、保育経験年数が上がるにつれて、様々な思いや経験を繋げて命の教育に結びつけて保育を捉えていることがわかった。

Ⅳ. 考察

１.「命」に関する絵本

「読んだことのある絵本」では、アンデルセンの童話である「マッチ売りの少女」や、おとぎ話である「３匹のこぶた」という昔から伝わる絵本や、「100 万回生きたねこ」、「じごくのそうべえ」、「ごんぎつね」という、広く知られている絵本が多かった。一方で「読んでみたい絵本」では、最も多かったのが「いのちのたべもの」であり、保育者は食に関する絵本に関心が高いことがわかった。また、「おじいちゃんがおばけになったわけ」が多いのは、直接「死」に言及している絵本よりも、身近な人や動物が死んで残されたものたちのことを描いた絵本を読みたいと思う傾向にあるためであると考えられる。同様に、「だいじょうぶ だいじょうぶ」は、おじちゃんと孫が共に過ごし、共に年をとっていくという老いについて描いた絵本であり、「死」そのものについては言及していない。つまり、「死」を直接描いたものよりも、「生」や「命の大切さ」や「老い」について描かれた絵本を読んでみたいと思う保育者が多いと推察される。

2.「命」の教育について

本調査の結果から、保育経験年数が上がると、「命」に関する教育をより広い視野から捉えていることがわかった。また、子どもたちが園で過ごす日々の中で触れる経験を大切にしながら、自分(子ども)が大切に思われているということを知ってもらいたいという保育者が多く見られたことから、「命の教育」として、「死」そのものを教えることも大事だが、それと同様に「愛されていること」を「命の教育だ」と捉えている保育者が多いことが推察された。「愛情」や「大切にされていること」を知ること自体が「命」を大切にすることに繋がり、それこそが「命の教育だ」と考えていると推察される。

引用文献

デーケン.A. 編 (2001)「生と死の教育」岩波書店

福山幸恵(2003) 看護基礎教育における「生と死の教育」のための物語絵本の分析　読書科学, 47,3,88-98.

樋口耕一(2014)「社会調査のための計量テキスト分析 ・内容分析の継承と発展を目指して」ナカニシヤ出版　p.15

井柳基名(1989)「子どもに対する「死の教育」に関する研究(9)～幼児教育現場における「死の教育」に関する一考察～　日本教育学会大曾研究発表要項 48(0),128.

工藤 真由美(2006)「保育者の絵本理解に関する一考察」四條畷学園短期大学紀要 39,13 - 19.

尾上 明子・中根淳子(2009)「生と死の絵本をめぐって(Ⅰ)」　名古屋柳城短期大学研究紀要,31,33-42.

Speece,M.W&Brent,S.B(1984) Children's understanding of Death:A Review of Three Components of a Death Concept.Child Development 55(5):1671-1986.

竹中 和子・藤田 アヤ・尾前 優子(2004) 幼児の死の概念 看護学統合研究 5(2),24-30.

辻本耐(2010) 幼児期における死の概念の発達的変化　大阪大学教育学部年報,15,57-69.

幼稚園教育要領(2018) 文部科学省

付記

本稿は、2018 年度に川上綾音が高知大学教育学部に提出した卒業論文を基に、玉瀬友美が加筆、修正したものである。

資料１　絵本リスト

1	ラブリーオールドライオン～おじいちゃんわすれないよ～
2	忘れても好きだよ　おばあちゃん！
3	いのちの木
4	しにがみと木の実
5	ちいさな死神くん
6	いのちのたべもの
7	ごんぎつね
8	ぼくのおおじいじ
9	わすれられないおくりもの
10	スーホの白い馬
11	マッチ売りの少女
12	さよならトンボ
13	マローンおばさん
14	エリカ 奇跡のいのち
15	100万回生きたねこ
16	だいじょうぶ だいじょうぶ
17	ぼくのだいじなあおいふね
18	いのちは見えるよ
19	葉っぱのフレディ―いのちの旅―
20	うさこちゃんのだいすきなおばあちゃん
21	じごくのそうべえ
22	えんぴつびな
23	サーカスのライオン
24	さよならをいえるまで
25	おじいちゃんがだっこしてくれたよ
26	アンデルセンの絵本　人魚ひめ
27	きつねのおきゃくさま
28	おねえちゃんにあった夜
29	どんなかんじかなあ
30	山のいのち
31	３びきのこぶた
32	ありがとう、フォルカー先生
33	でも、わたし生きていくわ
34	おじいちゃんがおばけになったわけ
35	ずーっとずっとだいすきだよ